

4章 学習スタンダードの原点 (備品 275)

前勤務校は、各教師、各教科指導方法による展開がばらばらであった。子どもたちは教師の指導技術に左右された。そこで学習スタンダードを作成した。学習スタンダードは、指導経験値に合わせるように作られている。初任校で授業スタンダードを学んで来なかった教師には、初期の学習スタンダードから入ってもらい、2~3月もしたら進化型学習スタンダードを習得していただくようにした。これにより、教師のかつての授業観（教師中心の話す型の授業）が減る。私たちは、従来型の授業（知識伝達型）では、子どもたちはついてこないと考えている。この解決が学習スタンダードによる授業と確信している。

1 初期の学習スタンダード学習過程

「Ⅰ導入（学習過程の提示）、Ⅱ展開（学習活動・学習形態の工夫）、Ⅲ終末（学習の実現状況の確認）、Ⅳ全体を通して」の4活動を全教科で取り入れた。だが、教師の自己流の授業実践が見られたため、1単位時間の授業展開の細分化を図った。Ⅰ見通し（①課題の提示②問いを持つ（問いの共有）③学習課題の設定）、Ⅱ解決活動（④自力解決⑤集団解決）、Ⅲまとめ（⑥まとめ）、Ⅳ振り返り（⑦振り返り）の7段階の1単位時間内の学習過程（学習時間の配分）を行った。

プログラム学習のようにしているのでどの教師も基本形に沿うような授業を行うことが出来た。この時期から、教室内に教師より子どもの声が響くようになり協働的な学びが出来るようになった。この7つの学習過程が教師だけでなく子どもたちにも身に付いたのはこの時期だ。子どもが主体的な授業に変わっていった。

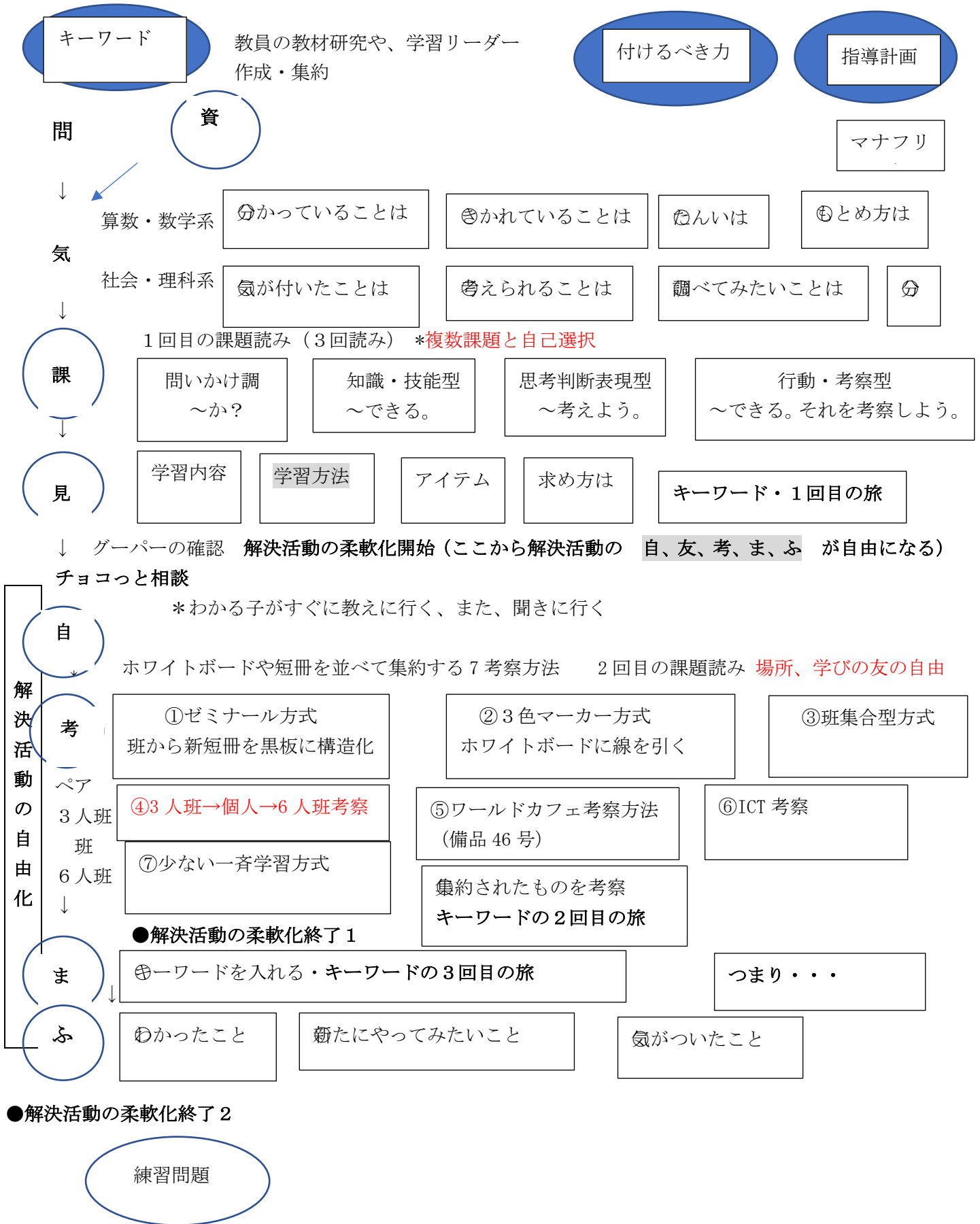


2 進化型学習スタンダード

(中央小)

アクティブラーニング（ワールドカフェのように動く）や協働的な学び（次期学習指導要領）の影響もあるが、初期の学習スタンダードでは、班で学び、少人数等で学ぶことが少なかった。そこで、進化型学習スタンダードでは、分からない子は初期から分からないので最初から「相談して次の学びへ」を中心にした学習過程を取り入れた。個別最適な学びもあり、子どもたちが自由に自分で課題や班を選択して学ぶようにした。特に学び合いが一斉指導ではなく、班で最初から最後まで完結するように学習過程にした。子ども達は、全体で集まることも少なくなり、和気あいあいの中で学べるようになった。思わぬ良さも出た。保健室登が減り、授業中に違うことをする子もいなくなった。

「新問題解決学習とグッズ」(備品 259)



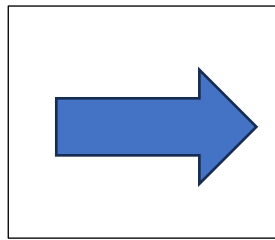
3 未来リレー型学習スタンダード(2024年、備品260)

未来リレー型学習過程

(1) 問題解決学習の学習過程の柔軟化

初期型学習スタンダード

- 1 問題(資料)の提示
- 2 気付き
- 3 学習課題の設定
- 4 見通し
- 5 自力解決
- 6 集団解決(考察)
- 7 まとめ
- 8 振り返り



- 1 問題(資料)の提示
- 2 気付き
- 3 学習課題の設定
- 4 見通し
- 5 解決活動・まとめ

解決活動の自由化

- どこから進めてもよい
- ア 自力解決
- イ 集団解決
(ペア、班、学び合い)
- ・単純意見交換
- ・7通りの考察
- ウ まとめ
- エ 振り返り

問題解決的な学習を確実に定着するために「学習スタンダード」を開発し、学習過程の定着を図ってきた。高知県版では、「高知県授業づくり Basic ガイドブック」だ。問題解決の手順は、ア I 問題(資料)の提示 イ II 問いをもつ ウ III 問いの共有課題の設定 エ IV 自力解決 オ⑨ V 集団解決 カ VI まとめ(価値の共有) キ VII 振り返りの7段階である。この学習スタンダードが大きな力を発揮し、全国の学校に影響を与えたとと思う。

現在は、この問題解決的な学習段階が柔軟に行われるようになってきた。それは、7つの学習過程は出来てはいるが、それをこなすだけになっている学校もあるからだ。柔軟な学習過程にはなっていない等の課題が出てきた。そこで、未来リレー型学習では、問題解決学習の最初から学習過程を柔軟化している。IT化の影響もあるが、子どもたちの中には一単位時間中一人で学びたい、仲間と学びたい、最初から仲間と相談をしたい、タブレットで学びたい、分からないことは自分の個性ととらえる等、様々な学びを願う子どもが出てきた。熊本万田小の3人学び→一人学び→6人学び。神奈川県長沢中の全員が班学びに入らなくてもよいという自然体の学び。こうした個別最適な学びを生かした学習スタンダードを参考にしよう。

学校に行って、児童が授業の中で身に付けられる能力が先生次第でかなり左右されると感じました。座学中心で教える先生がいて、「子どもが一人で考える」「子供対先生」のような授業もありました。そのクラスはある程度、力のある子どもたちが多かったので授業は成り立っていました。ですが能力の厳しい子どもに対しては、教育の質の担保ができていないのかと疑問を感じました。

学習スタンダードを使うと、分からない子どもに仲間が教えるということもできます。一人で考えられるヒントも見つけることができます。また、子どもたち全員が能力差も関係なく活躍することが可能です。授業中に子どもの生き生きとした顔が、将来、私が創る授業だと感じました。(秋の研究会、学生の感想)

2030 型セルフラーニング

(2030 型学習スタンダード)

(1) 学習課題を選択

①課題が一つ ②課題が2～6を自己選択 ③課題を自己発見

(2) 学び方の選択

①ゼミナール型 ②班集合型 ③3色マーカー ④ワールドカフェ

(3) 異学年の学び

①全校学び ②隣接学年学び(複式) ③同学年交流型

(4) 子ども学習評価会

①個々で評価 ②学級全体で評価と数値化 ③学校全体で数値化
(教師も参加)

(5) 教師の KEHAI を消す